



環境社会学会ニューズレター

JAES Newsletter

18(通号 23) 1998.10.27 環境社会学会発行

【学会事務局】〒180 東京都武蔵野市吉祥寺北町 3-3-1 成蹊大学文学部 高田研究室
Tel:0422-37-3675 Fax:0422-37-3875 E-mail:aki@fh.seikei.ac.jp
郵便振替口座:00530-8-4016 口座名:環境社会学会

目次

1.環境社会学会第 18 回セミナー開催について	1
2.報告要旨	3
3.国際社会学会・「環境と社会」研究委員会(RC24)からの報告	4
4.会員情報(住所・所属変更、新入会員)*プライバシー保護のため省略	6
5.編集後記	6

1.環境社会学会第 18 回セミナー開催について

萩原なつ子(東横学園女子短期大学)

恒例の秋季セミナーについてご案内いたします。

【セミナーの概要】

テーマ:「環境社会学における自然と文化」

日時:1998年11月21日(土)13:00~16:50

場所:関西学院大学E号館102号教室(地図参照)

事務局:鳥越皓之(関西学院大学)同補佐:脇田健一(岩手県立大学総合政策学部)

参加費:1000円

【今回のセミナーのねらい】11月30日から京都で第22回世界遺産委員会(ユネスコ)が開催されることになっています。世界遺産には「自然遺産」、「文化遺産」、そして自然と文化の「混合遺産」がありますが、近年、この混合遺産への関心が高まっています。またテレビ番組等を通して「世界遺産」が知られるにつれ、国内外の世界遺産を巡る観光ツアーも増加傾向にあります。そこで今回のセミナーでは、まず環境(自然環境・文化環境)を保護しながら、観光資源としても生かすという視点からみた社会活動や制度に注目し、これらの活動や制度が環境の維持または破壊にどのように関わるのかについて

明らかにできたらと思っています。そして環境を自然環境と文化環境を分けて考えるのではなく、これらを複合的視点で捉えることの重要性について議論したいと考えています。具体的には、下記の四氏にご報告とコメントをいただき、その後フロアを交えた質疑応答、討論を行いたいと思います。皆様どうぞ奮ってご参加ください。

【プログラム】

(1 1 : 3 0 報告者、コメンテーター、司会打ち合わせ)

1 2 : 3 0 - 1 3 : 0 0 参加受付

1 3 : 0 0 - 1 3 : 1 0 開会の挨拶・連絡事項

司会：萩原なつ子（東横学園女子短期大学）

1 3 : 1 0 - 1 3 : 5 0 報告（ 1 ）下間久美子（文化庁文化財保護部建造物課）

「世界遺産条約及びその運用のしくみについて」

1 3 : 5 0 - 1 4 : 3 0 報告（ 2 ）吉兼秀夫（阪南大学国際コミュニケーション学部）

「地域全域に展開する博物館・エコミュージアム 地域の記憶の井戸を掘り、掘り出された遺産相続の仕掛けづくりとその運動」

1 4 : 3 0 - 1 5 : 1 0 報告（ 3 ）長井三郎（屋久島・民宿晴耕雨読）

「屋久島で考えたこと」

1 5 : 1 0 - 1 5 : 3 0 コメント 日高敏隆（滋賀県立大学学長）

（ 1 5 : 3 0 - 1 5 : 4 5 休憩、フロアからのコメント用紙回収）

1 5 : 4 5 - 1 6 : 4 5 討論

1 6 : 4 5 - 1 6 : 5 0 閉会の挨拶

（ 1 7 : 0 0 - 1 7 : 4 0 運営委員会）

* 1 8 : 0 0 希望者による懇親会（¥2,000程度）

【交通のご案内】

JRご利用の方は、JR「大阪」駅に連絡する阪急「梅田」駅から、阪急神戸線に乗り、「西宮北口」駅（特急停車）へ。ここで、阪急今津線（宝塚方面行き）に乗り換え、ふたつめの「甲東園」駅で下車です。「甲東園」駅から会場までは、バス利用だと数分、徒歩で十数分です。なお、新幹線ご利用の場合、JR「大阪」駅は、JR「新大阪」駅で乗り換えてひとつめです。所要時間は、JR「新大阪駅」からは約1時間、阪急「西宮北口」からは約30分かかります。飛行機ご利用の方は、伊丹空港の場合、阪急宝塚線「蛸池」駅から「十三」駅経由で、阪急神戸線「西宮北口」駅で乗り換え。あるいは、空港からタクシー利用で直接、大学へ（3～4千円）。関西空港の場合は、JR「新大阪」まで特急「はるか」でいらして乗り換えて下さい。（別紙地図参照）

【宿泊について】

セミナー事務局での受付はしておりませんので、会員各自で手配して下さいますようお願いいたします。なお、近辺の宿泊施設の一覧を同封いたしますので、ご参照下さい。

【懇親会のお知らせ】

セミナー終了後、ささやかながら懇親会の用意をいたしております。会員相互の親睦を深めるため、セミナーにおいて議論したりなかったところを発展させるための場として、

ご参加いただければと思います。お申し込みは当日、会場受付のさいに承ります。（会費2000円）

【連絡先：環境社会学第18回セミナー事務局】

鳥越皓之（関西学院大学）、脇田健一（岩手県立大学総合政策学部）

phone:019-694-2728/fax:019-694-2701/E-mail:wakita@iwate-pu.ac.jp

関西学院大学社会学部共同研究室（家中茂 / 山室敦嗣）

〒662-8501 兵庫県西宮市上カ原 1-1

phone:0798-54-6222、E-mail:x3d753@kwansei.ac.jp

2. 報告要旨

世界遺産条約及びその運用のしくみについて

下間久美子（文化庁文化財保護部建造物課）

世界遺産とは、世界遺産条約に基づき世界遺産委員会が作成した「自己の定めた基準に照らして顕著な普遍的価値を有すると認めるものの一覧表（世界遺産リスト）」に記載された物件を指す。このようなリストの作成により、全人類のための世界の遺産の一部として保存すべきものを共通に認識し（人類の遺産）、遺産保有国はその国内的保護の改善と充実に努め（国内的保護）、それ以外の国々も国際的な補足的援助を提供することで保護活動に参加していこうと提唱し（国際的援助）、そのための制度的枠組みを与えている（体制の確立）のが世界遺産条約である。

ユネスコのみならず国連機関の重要な任務といえば、第一に途上国援助が想起されよう。しかし、世界遺産条約は、先進国、途上国といった区別なく、全人類にとって貴重な文化及び自然遺産に対し、国際社会全体で保護活動に取り組んでいくための枠組みを与えている。ユネスコにて従事した世界遺産に係わる二年間の実務経験から、世界遺産条約の運用のしくみに焦点を当て、一つの理念・目的の下に国際社会をまとめあげる「体制づくり」としての文化財保護行政の実態と課題について御報告する予定である。

地域全域に展開する博物館・エコミュージアム 地域の記憶の井戸を掘り、掘り出された遺産相続の仕掛けづくりとその運動

吉兼秀夫（阪南大学国際コミュニケーション学部）

「地域の中にいくつかの限られた美しい景観や自然、大事な文化財や記念物がある」というのではなく、「地域の中にあるすべての素材に価値があり、それらが一体となっはじめて地域は地域となる（自分の顔を持つ）」と考えるのがエコミュージアムである。エコミュージアムは1960年代にフランスのアンリ・リビエールがその概念を示し、1970年代からフランスでエコミュゼの名で生まれ始めたものである。一定地域（テリトリー）の地域の記憶の井戸を掘り、掘り出された記憶（遺産）を地域全体の中で保存・展示・活用していく博物館である。日本では観光や地域づくりの新しい概念として注目される傾向があるが、私は地域遺産（地域文化、環境文化）の遺産相続の仕掛けづくりとそのための運動であると考えている。エコミュージアムは従来の博物館のように建物の中に資源を集め

て展示するのではなく、テリトリー全体を展示室として、地域の遺産・記憶を本来の場で保存しようとするものであり、地域の姿を映す鏡を構成するのである。また、収集・保存しようとするものはあくまでも住民のそれであることが特徴である。主体は住民であり、その住民がアイデンティティを感じる領域（テリトリー＝文化圏）の中で大切にしたいという記憶を住民さらに来訪者にも理解できるように工夫をし、つまり地域を等身大で映す鏡を作り、その鏡を通して将来の地域像を考えていこうとするものである。エコミュージアムはコアとサテライト及び発見の小径によって構成されるが一般であるが、それらの多くはボランティア住民によってアソシエーションと呼ばれる団体が結成され、運営されることが多い。フランスのアソシエーションは1901年に制定されたアソシアシオン法に基づく団体であり、その活動が社会的に認められている。NPO法案がやっと生まれたわが国を約100年上回る住民による社会参加の文化やルールの蓄積があることを理解しておく必要がある。

屋久島で考えたこと

長井三郎（屋久島・民宿晴耕雨読）

ぼくは前もって何かを考えられる人間ではなく、いつでもその場主義です。そちらへ行ってから、その時に感じたことをしゃべってみたいと思っています。なお、こちらの新聞には、ここ最近感じたこととして「廃棄物モニュメント」、「自然との共生」、「あえて不便さを強いる仕掛け」、「風呂を焚く」、「合成洗剤不使用宣言」などというタイトルで、コラムを書いています。

3. 国際社会学会・「環境と社会」研究委員会（RC24）からの報告

満田久義（佛教大学社会学部）

1998年7月25日から8月1日まで、国際社会学会世界会議RC24部会がモンテリオール市で開催された。本稿では、今回のモンテリオール会議を中心に、この6年間のRC24の活動について述べることにする。

国際社会学会は、基本的には現在62の研究委員会（Research Committeeのほか、WGとTGを含む）によって活動運営がなされているが、われわれのRC24はその中でもとくに活発で、順調に発展してきている。現在のRC24の会員数は110名（参加者ではなく、会費納入者のみ）で、会費収入は1994年12月の467,90ドルから、今年7月現在の4661,50ドルと約10倍に急増している。

今回のモンテリオール会議では、RC24部会として、全会期中16セッションに91もの論文が投稿され、会場は巨大な「メインホール」であった。セッションの各テーマは、「地球環境変動」、「みどりの消費とライフスタイル」、「エコロジー運動（2部会）」、「エコロジカル・モダニゼーション（Ecological Modernization）」、「環境政策の新しい動向」、「環境への態度と行動（3部会）」、「社会理論と環境」、「持続可能な発展」、「リスクの社会学」、「環境に関する知識と問題への社会的構築（Social Construction of Environmental Knowledge and Problems）」、「環境社会学の最新研究（3部会）」と、非常に多岐にわたり、

この4年間に RC24 が主催したいくつかの国際会議やワークショップを集大成した感があった。

RC24 は、1992年にオランダ・ウトレヒト市近郊の Zeist の Woudschoten Conference Centre で開催された第1回環境社会学会議("Current Developments in Environmental Sociology" SISWO 主催)において創設された。より詳細に述べると、それまで国際社会学会にあった研究委員会、RC24 "Social Ecology" を発展的に吸収するかたちで、RC24 "Environment and Society" として正式に発足した。当時、研究委員会の名称を"Environmental Sociology" とか、"Sociology of Environment"にする案も考えられたが、RC24 のそれまでの経緯や、欧州と北米の環境社会学に対する考え方の差異から、より広範な捉え方ができる現在の名称に落ち着いた。そして、国際社会学会で精力的に活躍してきた Gyorgy Szell 教授(独・Osnabruck 大学)を初代会長に、事務局長に D. Duclos & J. Friedrichs (フランス)を、財務理事 Carlo Jaeger (スイス)を、そして理事として、R. Strassoldo(イタリア)、S. Carvalho H. (ブラジル)、R. Dunlap (米国)、A. Gijswijt (オランダ)、H. Mitsuda (日本)、B. Rhode(ベルギー)、P. Tamas(ハンガリー)、H. Teune、N. Vijaya(インド)、O. Yanitsky (ロシア)を選出した。この記念すべき初回会議には、国際社会学会の T.K. Oommen 会長を迎え、世界から約90名の環境社会学者(日本からは満田と堀川三郎)が一同に会し、研究情報ネットワークを創設した。

引き続いて、1993年1月と3月にパリ郊外の Chantilly で2回のワークショップが、それぞれ"The International Consortium for the Study of Environmental Security"と"The social functions of nature"というタイトルのもとで開かれた。1994年には、Bielefeld (独)で開催された第13回国際社会学会世界会議において、初めてリサーチ・コミッティとして部会をもった。同部会では、17のセッションと、ギデンズやダンラップのほか114の投稿論文があった。そして、Dunlap 教授(ワシントン州立大学)を1994年から98年の会長に、Gijswijt 教授(SISWO/アムステルダム大学)を事務局長に選出した。そして、1998年のモントリオール会議に向けて、できる限り環境社会学関連の国際会合を数多く開催し、環境社会学のグローバルな発展と環境社会学理論の交流を目指すことを決めた。

それをうけて、1996年10月にはブラジルのリオデジャネイロ市で"International Seminar on Quality of Life and Environmental Risks"が、そして同年11月には、インドのハイデラバード市で国際会議"Environment, Technology and Society"が開催された。1997年3月には、第2回 Woudschoten 会議"Sociological Theory and the Environment"が開催され、環境社会学の理論的発展におおなる貢献をした。とくに、近刊される2巻からなる報告書は、環境社会学のひとつの到達点を示している。

近年になると、1992年の Woudschoten 会議で企画され、世界の環境社会学の全体像を知ることのできる Redclift & Woodgate(1997)The International Handbook of Environmental Sociology をはじめ、マルクス環境社会学の Dickens, Reconstructing Nature やウェーバー環境社会学の Murphy, Sociology and Nature や米国で出版された教科書である Bell, An Invitation to Environmental Sociology など 環境社会学の重要な文献があいついで刊行された。

これらの他にも、社会的物質代謝論(Fisher-Kowalski)や Ecological Modernization 論(Spaargaren & Mol)や社会構築主義的環境社会学(Yearly),そして地球環境問題に関する

分野 (Redclift) など新しい領域で数々の大いなる展開がみられる。このように環境社会学の現状は、環境意識や環境運動などに関する実証研究はもとより、理論研究において顕著な発展を示しているといえる。

最後になるが、私はこの6年間を理事として、世界の環境社会学者が集う国際社会学会・RC24の創設にかかわれたことを誇りに思う。とくに環境社会学のグローバルな発展に寄与された Szell と Dunlap 両会長、Woudschoten 会議を成功させ、ニューズレターを12号まで発行しつづけてきた Gijswijt 教授らオランダのグループ、財務担当 Jaeger 教授 (スイス) らの多大な貢献に感謝の意を表したい。そして、2002年の国際社会学会ブリーズベン会議までの新執行部に選出された以下の方々のご健闘を祈念したい。新会長 Fred Buttel (米国)、副会長 Mercedes Pardo (スペイン)、財務理事 Carlo Jaeger (ドイツ)、事務局長 Gert Spaargaren と Arthur Mol (オランダ) 理事 Jean-Guy Vaillancourt (カナダ)、Marina Fisher-Kowalski (オーストリア)、N.Vijaya (インド)、長谷川公一、Steven Yearley (英国)、Leonardas Rinkevicius (リトアニア)、名誉理事 Riely Dunlap (米国)

4 . 会員情報

* 会員のプライバシー保護のため省略させていただきます *

5 . 編集後記

発送が事務局の手違いで予定より少し遅れてしまいました。すみません。アルバイトの学生も頼んで「さあ発送だ」という時に、宛名のラベルが無いことに気づいたのです。大慌てで松阪大学の寺口さんに送ってもらいました。

さて今回は、環境社会学会「第18回セミナー」のご案内号です。前回は26ページで写真も入れましたが、今回は実質8ページです。ということは特に報告しなければならない事件があまりないということです。しかし、メンバーも徐々に増えているし、『環境社会学研究』第4号も発行されたし、環境社会学会は順調だということを表わしています。ただ問題なのは、会費の納入がまだ7割に届いていないことで、未納の方にはまた金額を書いた郵便の払込用紙を同封しましたので、どうかよろしく。

「第18回セミナー」は、萩原さんと吉兼さんが主な企画と人選を行い、脇田さん、家中さんたちが関西学院大学の会場を受け持つという形で進んでいます。セミナー事務局トップの鳥越さんは、日本社会学会の会場設営の総責任者ということもあって、実務は脇田さんたちがしてくれることになっています。でもそんなに大変な時にセミナーを引き受けて下さって、どうもありがとうございました。今回は「エコ・ミュージアム」「エコ・ツーリズム」など今まで取り上げたことのなかったテーマで、かつそれぞれの分野での錚錚たる報告者がそろっていますので、みなさん奮ってご参加ください。